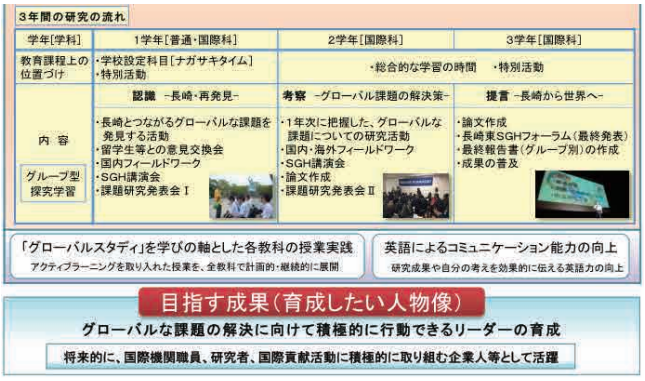
長崎県立長崎東高等学校

世界の「平和と共栄」を目指し、長崎から世界へ漕ぎ出す人材の育成

【構想の概要】

長崎ならではの３つの視点（国際平和，医療支援，水環境）の１つからグローバルな課題を把握させ，その解決の手立てを考察させる課題研究を中心とした取組を行うことにより，日本及び世界の「平和と共栄」を目指して，グローバルな課題の解決に積極的に取り組むリーダーを育成するためのプログラムを研究開発する。



平成30年度実施用教育課程表（国際科）

教科	科目	標準単位	必履修科目	高校1年	高校2年		高校3年	
				普通・国際科	国際科		国際科	
					文系	理系	文系	理系
国語	国語総合	4	○	6				
	現代文B	4			3	2	2	2
	古典B	4			3	3	4	3
地理歴史	世界史A	2	○					★(2)
	世界史B	4			★3	★(3)	3	(3)
	日本史A	2						
	日本史B	4	○		(3)	(3)	(4)	(3)
	地理A	2						(2)
	地理B	4			(3)	(3)	(4)	(3)
公民	現代社会	2	○	★2				
	倫理	2						
	政治・経済	2						
数学	数学Ⅰ	3	○	3				
	数学Ⅱ	4		2	4	2	3	
	数学Ⅲ	5				2		4
	数学A	2		2				
	数学B	2			2	2	3	2
理科	※科学と人間生活	2	※			2		
	物理基礎	2	※			(2)		
	物理	4	基含			(2)		(4)
	化学基礎	2	選む	2				
	化学	4	3 2			3		4
	生物基礎	2	科科		2	(2)	2	
	生物	4	目目			(2)		(4)
	地学基礎	2	か		2		2	

保健体育	体育	7～8	○	3	2	2	2	2
	保健	2	○	1	1	1		
芸術	音楽Ⅰ	2	○	(2)				
	美術Ⅰ	2		(2)				
	書道Ⅰ	2		(2)				
家庭	家庭基礎	2	○	2				
	家庭総合	4						
	生活デザイン	4						
情報	社会と情報	2	○	1				
	情報の科学	2						
英語	総合英語	3～15	※※	4	3	2		
	英語理解	2～8			2	2	2	2
	英語表現	1～10		3			3	2
	時事英語	2～8			2	2		
	異文化理解	2～8	※※				2	2
※国際理解	※日本語探究						★1	
	※地歴特論				★1			
	※サイエンス特論					★1		★1
	※ナガサキタイム			★1				
ホームルーム		3	○	1	1	1	1	1
総合的な学習		3～6	○		1	1	1	1
履修単位合計				35	35	35	35	35

・1学年の「社会と情報」の1単位は、「ナガサキタイム」で代替する。
・2、3学年の「総合的な学習」では、SGH「グローバルスタディ」の内容を実施する。
・※※「総合英語」「異文化理解」は、原則履修科目。
・文系では、★「現代社会」「世界史B」「地歴特論」「日本語探究」「ナガサキタイム」は、専門科目とみなす。
・理系では、★「現代社会」「世界史A」もしくは「世界史B」「サイエンス特論」「ナガサキタイム」は、専門科目とみなす。

ＳＧＨ研究開発と教科の取組

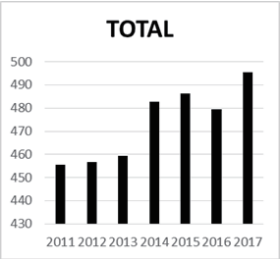
「長崎の視点からグローバル課題を考察させるためのプログラム開発」（研究開発単位Ⅰ）として以下の取組や活動を行っている。

① SGH 基調講演会（長崎大学学長）
② SGH 講演会（長崎大学，長崎県立大学の教員 等）
③国内ＦＷ（長崎大学，長崎県立大学，協和機電工業，長崎市，浦上浄水場，原爆資料館 等）
④大学教員，院生，留学生等との意見交換会（長崎大学，長崎県立大学，長崎外国語大学，マサチューセッツ工科大学，コンコーディア大学 等）
⑤海外の生徒との意見交換（シンガポール国立大学，ホーチミン師範大学，ハーバード大学，ウィスコンシン大学 等）
⑥海外ＦＷ（長崎大学熱帯医学研究所ベトナム研究拠点，WHO，JICA ベトナム，国連軍縮部 等）

上記プログラムは学校設定教科「国際理解」，「総合的な学習の時間（グローバルスタディ）」，及び「特別活動」において実施している。高校１年生では学校設定科目「ナガサキタイム（1 単位）」を設定し，学年全職員が課題研究の指導にあたる。「平和」「医療」「水」に関する課題研究をサポートするため，高校１年次では各教科が連動し，関連する学習内容やスキルの向上に取り組む。具体的には「保健」や「家庭基礎」の授業では疾病や仮想水について教示し，課題研究のテーマ設定や社会問題について考察する力を養っている。様々な視点から平和問題をとらえさせるために「現代社会」の授業では国連，公害，難民について４月当初に取り上げ，「SGH 講演会」との連動性を高める。グローバル人材育成のためには「コミュニケーション能力の向上」（研究開発単位Ⅲ）が必要なことから，日本語や英語での発表技術を高めることを目的とし，「コミュニケーション英語Ⅰ」「英語表現Ⅰ」「国語総合」等の授業ではプレゼンテーション，ポスター発表，スピーチを実施している。

高校２年次では，学校設定科目「サイエンス特論」において英語で書かれた教材を用いて生物を学んでいる。生徒は実験や標本作製の過程を論理的なレポートにまとめ，理科教員がレポート評価を行う。こうした学びが，「総合的な学習の時間（グローバルスタディⅡ）」で英文レポートを作成する際に役立つものと考えている。また，「発信力を育成する」（研究開発単位Ⅲ）ために，長崎大学や長崎県立大学の英語教員と本校英語科教員が連携して「パラグラフライティング講座」や「英語論文講座」をリレー方式で実施し，全研究班が英語レポートを作成している。「時事英語」の授業では週に２回，英語ネイティブ講師と日本人英語教師のチームティーチングが行われ，エッセイライティングや模擬国連プログラムに取り組んでいる。こうした活動が，生徒の英語による発信力や課題研究英文レポート作成技術の向上に寄与している。

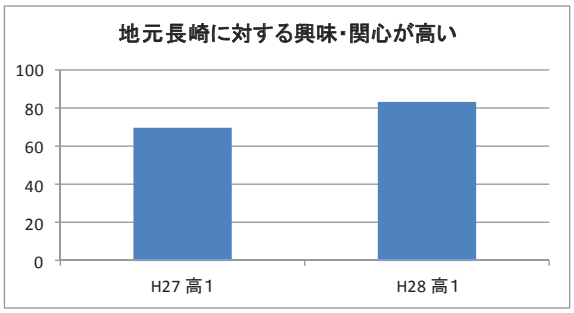
高校３年次の「サイエンス特論」では国際バカロレア対応教材を活用して，英語をとおして数学を学ぶことも行っている。数学的発想力，深い考察力，多面的思考力の育成をねらいとしている。生徒が担当の数学教員に英語で記された問題を解説する場面があり，生徒と教員が協働で学び合う課題解決型学習となっている。こうした合教科型授業は SGH 指定以前は見られなかった。英語科の「異文化理解」の授業では，即興ディベートやスピーチ活動が実践されているが，そのねらいのひとつには課題研究プレゼンテーションやポスター発表における質疑応答のやりとりをスムーズにすることがある。生徒の変容を測るエビデンスとしてベネッセコーポレーションの英語技能試験 GTEC を用いている。2014 年にアソシエイト校に指定され，英語の４技能統合型授業に取り組んできた結果，下表のような成果が見られる。

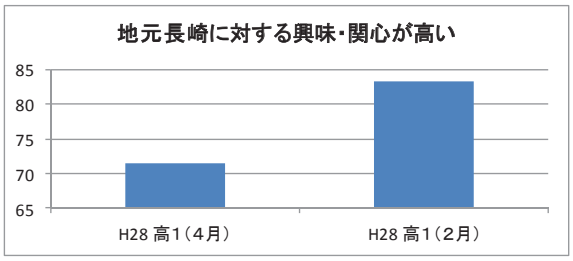


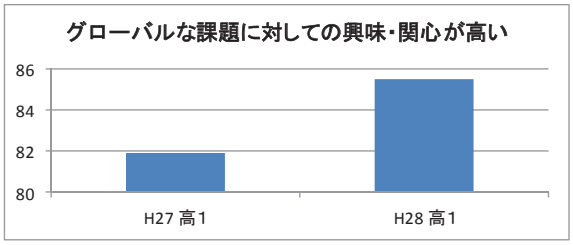
※高校１年次 12 月実施

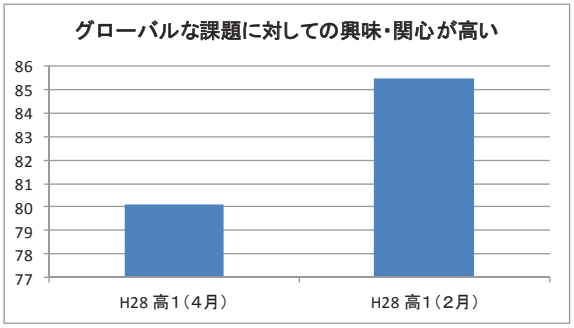
また，H30 年３月に卒業した SGH 対象生徒のうち CEFR のＢ１以上は 91% であり，成果目標の 90% を上回る結果となった。

年度末に実施する生徒自己評価では，「地元長崎に対する興味・関心が高い」，「グローバルな課題に対しての興味・関心が高い」という項目に肯定的な回答（「あてはまる」，「だいたいあてはまる」）をした生徒がいずれも高い割合を示している。次表で示されたとおり，平成 28 年度の高校 1 年生の方が前年度生よりも高い結果となっている。これは指定 2 年目になり，プログラムの内容が充実したことや高校教員の指導体制が改善されたことが一因であると考察している。特に顕著な結果が見られた「指定 1 年次（H27）の高校 1 年生」と「指定 2 年次（H28）の高校 1 年生」との比較と，指定 2 年次における高校 1 年生の 4 月から 2 月の推移を以下に示す。









評価エビデンス

「グループ型探究学習のプログラム開発」（研究開発単位Ⅱ）を主として次のように行っている。各研究班を 4 ～ 6 名で構成し，班長 1 名と記録係 1 名を選出する。班長は指導教員（担任・副担任に加え他学年の教員が関わることもある）に課題研究の進捗状況を報告し，指導教員からの助言を班員に伝える。記録係は探究学習をポートフォリオに記録する。ポートフォリオは班長，個人，指導教員の 3 人の視点で評価することを試みている。各班員は交代制で講演会，演習講座，意見交換会等に参加し，収集した情報を班内で共有する。こうした役割分担によって責任感が養われ，協働的思考力やコミュニケーション力を向上させることができる。また、自分と他者の意見を比較することで批判的思考力や創造的思考力が涵養されると考える。

指定 2 年目の平成 28 年 12 月から「批判的思考力」「協働的思考力」「創造的思考力」を多面的かつ客観的に測定するために，ベネッセコーポレーションの「GPS－Academic」テストを用いて経年経過を測っている。平成 29 年度の高校 2 年生 SGH 対象生徒（国際科 80 名）の総合評価は次表のとおりである。

網掛けで示したＡ評価の数値は全国集計を上回っている。特に協働的思考力と創造的思考力において 2 年生国際科の数値が高いことがわかる。

※Ａ評価は高校卒業レベル

思考力	批判的思考力		協働的思考力		創造的思考力	
評価	全国	**国際科**	全国	**国際科**	全国	**国際科**
S	0 %	**0 %**	2 %	**6 %**	1 %	**3 %**
A	20 %	**29 %**	34 %	**59 %**	24 %	**44 %**
B	58 %	**62 %**	51 %	**35 %**	58 %	**54 %**
C	21 %	**9 %**	12 %	**0 %**	16 %	**0 %**
D	1 %	**0 %**	1 %	**0 %**	1 %	**0 %**

課題研究に必要な主体的で協働的な深い学びを推進するために，AL 研修会を年 2 回実施している。AL 週間を 6 月と 10 月に設定し，併設の中学校を含めて全職員が AL 型授業を実施し，代表者が研究授業を行う。校種と教科を越えた授業参観と授業研究会を毎回行うことで，カリキュラムマネジメントや教科横断型の授業開発視点を醸成している。また，SGH 課題研究では論理的思考力，考察力，コミュニケーション力が必要なことから，H29 年度は「深い思考につながる発問」，H30 年度は「発問・書く」

を全教員の共通テーマとして AL 型授業開発に取り組んでいる。AL 型授業は SGH 対象生徒はもとより，併設する中学校や高校の非対象生徒全員に実施される。AL 型授業に全教員が取り組んで 3 年目となり，協働学習や発表活動に改善と深化が見られることが指導助言者である京都大学の溝上慎一教授や熊本大学の川越明日香准教授からも指摘されている。AL 型授業の浸透は，前述の GPS テストで協働的思考力や創造的思考力の評価が高いことの要因とも考えられる。なお，成果普及として 10 月の研究授業と研修会は他校教員にも公開している。

H28 年度研究授業（外部公開）本校体育館

「第 1 回九州 SGH フォーラム」（成果普及）

SGH 事業成果の普及を目的として当初計画どおり指定 3 年次に「長崎東ＳＧＨフォーラム」を開催した。指定 4 年次の本年度はこれを拡大し，「第 1 回九州 SGH フォーラム」（H30.7/9）の開催準備を進めている。九州内の SGH 指定校 14 校とアソシエイト校 4 校に参加を呼びかけ，12 校の生徒と教員が参加を予定している。プログラムの内容は長崎大学前学長の片峰茂氏による基調講演，8 校による英語プレゼンテーション，3 校による英語ポスター発表，5 校の代表生徒によるパネルディスカッションである。フォーラム前日には「生徒交流会」を企画し，参加校の生徒・教員が情報交換できるよう工夫した。ホスト校として，生徒交流会やフォーラムの運営（司会），会場案内は高校 3 年生を中心に行う予定である。

本フォーラムのテーマを「SGH で身につく力と将来への展望」とし，パネルディスカッションのファシリテーターには本校 SGH 運営指導委員を指定 1 年次より務める山口大学准教授の陳内秀樹氏にお願いした。なお，案内文書は長崎県内ほぼすべての公立・私立高校にも送付し，SGH ホームページ及び本校ホームページにも掲載した。主なプログラムと発表校を次にまとめる。

基調講演　長崎大学前学長 片峰茂氏

英語プレゼンⅠ（午前）
①大分上野丘　②五ヶ瀬　③鞍手　④京都　⑤福岡雙葉

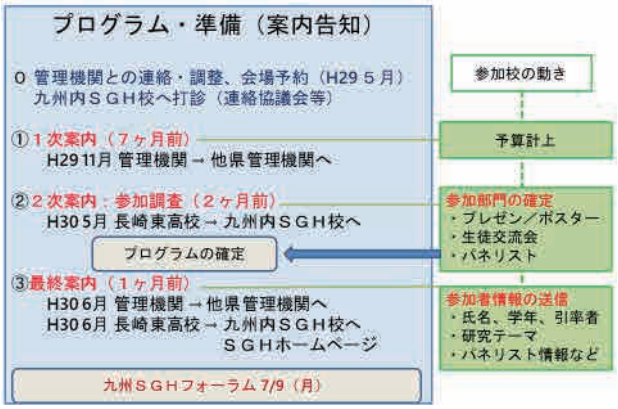
英語プレゼンⅡ（午後）
⑥明治学園　⑦長崎東　⑧甲南

英語ポスター
①長崎東　②佐賀農業　③水俣

パネルディスカッション
・雙葉、明治、長崎東、済々黌、甲南

本フォーラムのモデルとしたのは鹿児島県立甲南高等学校（H27 指定校）が主催する「高校生国際シンポジウム」である。平成 27 年度より毎年約 12 名の生徒と 2 名の教員を派遣し，さまざまな教育的効果を享受してきた。ホスト校の生徒が主体的に運営に関わる積極的な姿勢，課題研究の口頭発表やポスター発表での意見交換，生徒交流会での学び合いなど，参加した生徒だけでなく教員の資質向上にもつながる素晴らしいシンポジウムである。

本フォーラムを開催するにあたり，14 か月前から管理機関との連絡や調整を進め，会場（長崎ブリックホール）を予約した。平成 29 年 6 月に開催された「平成 29 年度スーパーグローバルハイスクール連絡協議会」等，他の九州内 SGH 校担当者と会する機会を利用し，周知を図った。開催までの準備を下記フローにまとめる。



H30 年 6 月 24 日現在，参加者数は未確定ではあるが，600 名を超えるものと思われる。他校教員の参加も 30 名以上が見込まれる。次年度も本フォーラムを改善し，成果普及に努めていきたい。